

## グルココルチコイド・ 免疫抑制薬・ 分子標的薬 Up To Date

免疫とは、自己と非自己を識別し非自己に対して働く防御機構で、人体の生存には必要不可欠です。しかしながら、時に免疫活性化に伴う過剰な炎症や自己に対する免疫応答が人体に有害に働くことがあり、自己免疫疾患や炎症性疾患を引き起こします。これら疾患の治療薬として、これまでは幅広く免疫を抑制するグルココルチコイドや免疫抑制薬がさまざまな領域で使用されてきましたが、近年では病態のなかで中核的な働きをする分子を特異的に抑制することで免疫調整機能を発揮する分子標的薬の臨床応用が実現しています。

近年、治療薬や治療戦略の進歩により、これら治療薬のラインナップや使用に対する考え方が大きく変化してきました。長年にわたって「必要悪」とされてきたグルココルチコイドの使用を必要最小限とし、副作用を管理しながら最適な治療効果を得るための工夫や、免疫抑制のリスクと効果のバランスに基づいた個別化医療の実現が進みつつあります。また、各疾患領域において薬剤減量やグルココルチコイドフリー、薬剤フリーを目指した研究も活発に実施され、投与量や期間、併用薬の最適化に関する知見も蓄積されてきています。さらに、1つの分子標的薬が多領域の疾患に同等の効果を発揮することもあれば、同じ領域内でも奏功する疾患としない疾患が混在したり、分子標的薬によって本来有効なはずの病態がパラドキシカルに増悪したりするなど、病態や免疫のメカニズムを改めて議論する契機ともなっています。一方で、続々と新規薬剤が開発され、診療が複雑化し、なじみのない薬剤に遭遇して医師側が不安感を覚えることも増加しているように感じています。

本特集では、基本的な知識や近年の分子標的薬を含む治療薬を総括的に理解できる情報とともに、臨床現場における実践的な知見や臨床上のピットフォールなどをご紹介します。多数のサイトカインや細胞表面抗原の名称が続々と登場して複雑かもしれませんが、標的分子と適応疾患を表にまとめるなどしてわかりやすく表現するよう努めました（p. 909 を参照）。これら薬剤を使用中の患者さんが実地医家の先生方を受診された際にお役立ていただき、薬剤に戸惑われることなく、診療上の注意点に留意しながら円滑な診療ができる一助となれば大変幸甚に存じます。



金子祐子

（慶應義塾大学医学部リウマチ・膠原病内科）